

## 旅立ち

立石 富男

今年度もあつという間に講座の終了がやってきた。月に一回、トータルで八回しか会っていない講座生なのに、一月の閉講式では何かしら生徒を次のステップ（学年）へ送り出す学校担任のような気持ちになる。わずか八回とは言え、ずっと原稿につき合ってきたせいだろう。書き始めから書き終えるまでの期間、成長を見守りながら読んできた。今回も瑞々しい感性と個性に出会い、刺激を受けた。「ありがとう」と言うのは私たち講師のほうかもしれない。

今年度は世界的に流行したコロナウイルスのせいで、講座は中止になるのではないかという思いもあつた。しかし予定通り実施された。これは鹿児島県立図書館の英断だと評価したい。そのおかげで参加した高校生たちは自分探しの執筆活動にチャレンジできた。学校では得られない貴重な経験をしたらはずである。早くに書き上げた人、最後までもがき苦しんだ人、それぞれの内面の格闘がこちらにも伝わってきた。

私が言い続けてきたのは、数学の微分積分と違って書くことは社会に出ても必ず役に立つ、だった。だから若いうちに力をつけてほしいのである。将来どういう道に進んで行くのかわからないが、この八か月間を忘れないでほしい。できれば小説を書き続けてほしい。原石は磨かなければただの石ころである。そのことを肝に銘じて、さあ、出発だ！

## 応募は創作の栄養源

出水沢 藍子

今年ついに、文芸ゼミの受講生が「南日本文学賞」の一次予選を通過しました。開講7年目のビッグニュースです。応募することは表舞台に立つこと。多くの人の目に晒され、勇気をもって賛否の評を受け止める。それによって、作品は磨かれていきます。応募は創作の栄養源！

映像文化がこれほど発達している時代になぜ、あえて「ことば」で描こうとするのか。それを問い続けることが大切です。映像では捉えることのできない人間の内面を、映像以上に鮮やかな言葉で表現するように心がけること、そこに「ことば」で書き表すことの醍醐味があると信じています。

学業の合間に小説の想を練って書き起し、ストーリーを展開させ、途中で大幅に書き直しながら、晴れて脱稿の時を迎えました。受講生のお喜びはいかほどでしょうか。

「筆が進まない苦しさ、締め切りが迫る焦り、読者がいるというプレッシャーを感じた」「自分の作品を読んでもらえた喜び」や「自分とは違った価値観を持つ人とめぐり会えたことが刺激となり視野が広がった」、「厳しい意見にへこんだりしたが、結局私は文を書くことが好き」などなど、ゼミナール受講感想文にはたくさんの方が寄せられています。

この経験が今後の創作の大きな力になるはずですよ。これをバネにして書き進み、どんどん応募していきましょう。